第一学年　国語科学習指導案

日　時　令和三年十一月十九日(金)　五時間目
場　所　一年四組　教室　、キャリア学習室
学　級　一年四組（男子十三名・女子十九名　計三十二名）
授業者　村瀬　友美

一、単元名「筋道を立てて」
教材名「話題や展開を捉えて話し合おう　グループ・ディスカッションをする」

二、単元および教材について

近年、社会ではコミュニケーション能力へのニーズが高い。そして、状況や場面、目的に応じて重視され、求められるコミュニケーション能力は多様である。それが総合的に発揮される場として、情報の共有や問題解決のために話し合いはある。また、話し合いは教室を学び合いの場にするために必要な活動である。自分の考えを表出し、相手の考えを受容することで、他者の考えと自分の考えとの共通点や相違点が明確になる。自分になかった視点を自然と取り入れることになり、新たな発想でよりよい解決策を見つけることもできる。普段は手段である話し合いだが、その目的や、参加者の人数、期間や時間など、条件によって方法や必要な能力は異なってくる。だから、本教材で目的として考えることによって、話し合いとは何か、話し合いを行うために必要な能力は何か、それらをどのように身に付ければよいのかを考えていきたい。

話し合いの意義を感じられる場にするためには、一人一人が自分の考えを表出し、それを深められる場になっていなければならない。その話し合いは何のために行うのか、参加者全員で話し合う目的を確認し、話題に使われている言葉の意味を定義したり確認したりする。話し合いの前提を整理してから始めると、方向性が定まり、相互の意見の関係性を捉えやすくなる。

話し合いの参加者は、一人一人がどのような姿勢で話し合いに臨み、振る舞うかという個人に向けた視点だけではなく、参加者全員が意思決定や問題解決を行うグループとして、建設的な話し合いになっているかを確認していくという俯瞰的な視点が必要となる。話し合いの途中段階においても目標に向けて抜け落ちている点はないか、今話している話題は目的から逸脱していないかなどの意識がないと、自分の意見を言い合うだけの場となり、話し合いは深まらない。

教育の今日的課題として、生徒に思考力、判断力、表現力等を身に付けさせることが挙げられている。「話すこと・聞くこと」の考えの形成に関わる指導は、その点で重要な役割を担う。なぜなら、生徒は言語によって思考し、言語によって他者に伝えるからだ。話し合う力は思考力、判断力、表現力等を高めるために教科横断的に活用できる。

グループ・ディスカッションは四～六人のグループで時間を決めて話し合い、考えを広げたり深めたりしながら意見をまとめ、全体に報告する方法である。全体の議論や決定に一人一人の意見を反映させるために行う。司会や書記の役割を決め、限られた時間の中で目的に向かって話し合う。

単元の付けたい力

【知識及び技能】(2)情報の扱い方に関する事項
ア　「三角ロジック」を用いて、考えと根拠が適切に結び付いているかを考えながら話したり、聞いたりできる。

【思考力、判断力、表現力等】A　話すこと・聞くこと（1）
オ　異なる考えを比較し、曖昧な点について質問したり確かめたりしながら互いの考えを結び付けて、自分やグループの考えをまとめることができる。

【学びに向かう力、人間性等】
話し合う力を自覚して使いながら話し合いの質を向上させ、実生活で話し合いを効果的に取り入れようとする。

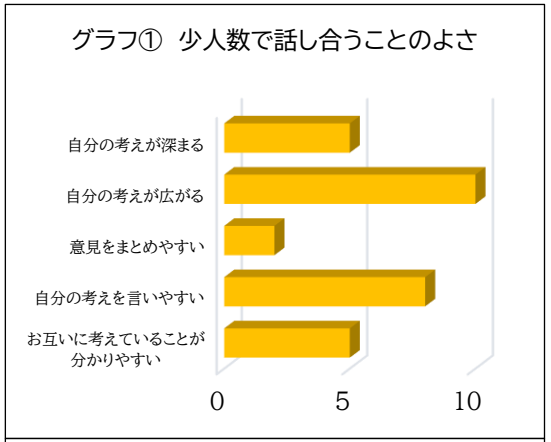
三、生徒の実態

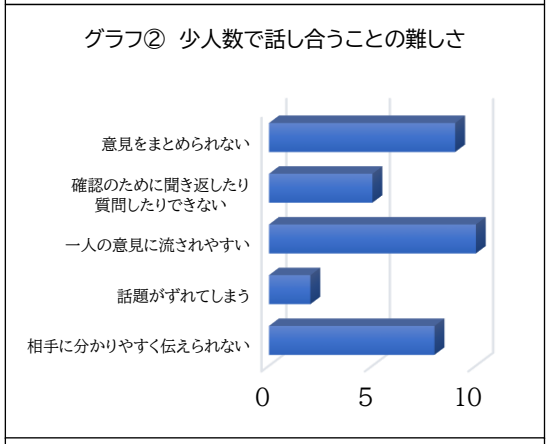
日常の生徒の話し合いは、自分の意見を言うことができる全体の三分の一の生徒が中心となって進んでいき、一度も発言しない生徒が三分の二いる中、多数決でものごとが決められていく。

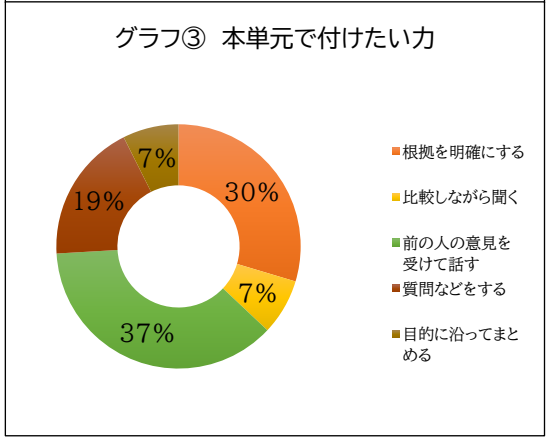
刻一刻と事態が変化していく予測困難な現代において、多種多様な考えをもつ人が増えている。生徒はその社会を生きていかなければならない。目の前で起きる問題を解決したり、現状を改善したりしたいと思ったときには、自分の考えをもち、自分とは違う他者と話し合い、合意形成を図る必要が出てくる。日常生活の中で生きてはたらく力となるように、グループ・ディスカッションの方法を知るだけに留めず、どのように伝えれ

ば相手を納得させられるか、どのような質問をすればより相手の意図や想いを汲み取れるのか、どのように話し合えば目的に沿ったゴールに辿り着けるのかを考えることが深い学びにつながると考える。

本単元では、少人数で話し合うことのよさや難しさについて事前意識調査を行った。この結果から、少人数で話し合うことのよさは自分の考えを言いやすいことや意見をまとめやすいことであると捉えている生徒が多いことが分かった。(グラフ①)一方で、一人の意見に流されやすいことや話題がずれてしまうという難しさも感じている。(グラフ②) 生徒が考える本単元で付けたい力は、聞き手に伝わるように根拠を明確にして自分の考えを伝えること、自分の考えと他の人の考えを比較しながら聞くこと、話し合いの目的に沿ってまとめることであることが分かった。(グラフ③)これらの結果から、【思考力、判断力、表現力等】のＡ 話すこと・聞くこと (1)イ話すこと・エ聞くことを踏まえて、オ話し合うことに焦点を当てて学習活動を仕組むこととする。







四、実践に関わって

実践内容(1) 仲間と共に考えを広げ、深める指導の工夫

① 目的意識と相手意識をもった表現活動の充実

第一時では、過去にどのような話し合いを行ったかを挙げ、事前調査に沿って生徒の解決したい課題を明らかにし、本単元で付けたい力を確認することで学ぶ必然をもたせる。(グラフ③) 第二時では、「よい話し合いにするための三か条」を決めるという話題を話し合うことを通して、以後グループ・ディスカッションを行う際の他者評価・自己評価の項目を決める。次に、生徒同士でアイデアを出し合い、話題を設定することで話し合う必然をもたせる。話題は以下の条件を参考に考える。条件①:利害関係が対立し、複数の立場の人が関係するもの。条件②:現時点で、社会で合意された結論が出ていないもの。条件③:全員が興味をもって話し合える面白そうなもの。条件④:話し合う仲間の賛否が分かれるようなもの。

② 小集団の充実

また、話し合う基盤として、それぞれの話題について前時に自分の考えをもたせ、意図的にグループを仕組むこととする。第三～五時では計三回のグループ・ディスカッションを行う。第三・四時は前半、半数の生徒がグループ・ディスカッションの参加者となり、もう半分の生徒は観察者となり、参加者同士、観察者同士、参加者と観察者合同の順で振り返りを行う。後半は立場を入れ替える。第五時は他者評価・自己評価を踏まえて改善をしていくことを目標として全員がグループ・ディスカッションに参加する。自身が話し合うことと他者による話し合いを観察することを通して、協働的で建設的な話し合いとはどのようなものなのかを主観的・客観的に考えられることを意図するものである。計三回のグループと話題は毎回変更する。生徒の資質・能力を考慮しつつ、話題に対して異なる立場の生徒がグループ内にいるようにグループを仕組む。

③ ＩＣＴの活用

一人一台端末はあくまで手段であり目的ではないことを念頭に置き、言葉による見方・考え方をはたらかせ、深い学びを得られる授業になっているかを念頭に置きたい。国語科においては意見共有のツールとして有効であると考える。本単元では話題に対する自分の考えをまとめ、予想される質問とその答えを考える。その後、グループの仲間の意見を思考ツール「ピラミッドチャート」に記録し、それぞれの意見のよい点や問題点を考える。

実践内容(2) 自己の成長や考えの変容を実感できる評価の工夫

① 身に付けた資質・能力を振り返る

国語科における深い学びとは、知識(宣伝的な知識)・技能(手続き的な知識)が関連付いて構造化されたり身体化されたりして高度化し、駆動する状態に向かうこと。つまり、言葉による見方・考え方(生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して、捉えたり、問い直したりして、言葉への自覚を高めること)をはたらかせ、言語活動を通して知識を「分かり」「使える」ようになること。また、その奥にある原理を理解し、他の場面においても活用できるという方法の習熟にまで達する学びのことを言う。「話す・聞く」活動における言葉による見方・考え方をはたらかせるとは、言葉を発する人が、この言い方で相手に伝わるかを意識して話したり、相手は何を伝えたいのかという話し手の意図や想いを推し量りながら聞いたりすることを言う。

資質・能力を確実に身に付けるために、生徒一人一人の事前意識調査や前時に考える話題に対する自分の考えと、それを支える根拠をどのような視点から考えているかを把握する。そして、振り返りからどの生徒がどこでつまずいているのか、或いはどのような考え方をしているのかを一単位時間の中で掴む。

② 考えが広がったり深まったりした過程を振り返る

「声が小さかった」「質問が少なかった」といった表面的な振り返りに留まることなく、話題や展開を捉えた話し合いをするための具体的な改善策を見つけることができるように、事前に仲間の意見に対してよい点と問題点を考えたり、振り返りのワークシートでは答え方の文例を示したりして、生徒が話し合いを振り返る際に着目する視点を焦点化する。

◆話し合いを広げたり深めたりした発言は、誰のどのような発言だったか。

例 ・□□さんの『～～』という発言は、◇◇という点で意見を深めたと思う。

◆もっとよい話し合いにするために、改善できそうな発言を具体的に挙げる。

例 ・○○という意見の根拠で△△という内容も言えば、もっと具体的になって説得力が増した。
・質問は『～～』という言い方にすると、もっと伝わって考えが深まった。
・○○という意見について、△△という質問もすれば、さらに考えが深まった。
・結論をまとめるとき、○○という意見の△△という点についても確認した方が、問題点を整理できた。

③ 指導と(見届けを含めた)評価の一体化

第二時で「よい話し合いにするための三か条」という話題で話し合い、生徒が決めた三か条を第三～五時で行うグループ・ディスカッションの振り返りの項目とする。また、話し合い方を互いに評価する中で、全員が納得できる話し合いにするための「言葉の技」を提示し、自分が本単元で付けたい力を自覚し、それを適切に設定する。第三・四時の終末で三か条の妥当性を見直す場を設け、改善を重ねて本時に向かう。

三か条の見直しと同様に、生徒は「言葉の技」の「何を」「どのような場面で」「どのような言葉で」「どのような効果をねらって」用いるかを考えていく。「全員が納得できる話し合いを実現させるためには、更にどのようなことが必要だろうか。」という発問によって実践を振り返らせ、「言葉の技」の自覚化を促したい。このことが本時において話し合いの内容だけでなく、方法にも意識を向けさせることになると考える。また、後で話し合いの過程を振り返る際の視点としても機能できるようにした。

この発問をした後、話し合いがよりよく進んだ場面を想起させ、「言葉の技」の効果を考えさせる。また、話し合いが停滞した場面も想起させることで、事前に提示した「言葉の技」の用い方をより具体的に考えさせたり、全員が納得できる話し合いを実現させるための新たな「言葉の技」を生徒自らが見出したりすることにもつながると考える。発問に対する生徒の考えを次の視点で想定しておく。

【自分の考えの伝え方】 ・根拠の組み立て方 ・言葉の選択 ・反論の仕方
【互いの考えの整理の仕方】 ・共通点の意味付け ・相違点の見出し方 ・視点の変化
【話し合いを進める意識】 ・目的意識 ・当事者意識 ・折り合いを付ける

この分類を基に、生徒一人一人の学習について、何をどこまで理解し、実践し、どのような気付きを得たのかを評価する。

本時の終末では、「『全員が納得できる話し合い方』を目指してみて考えさせられたことは」という言葉に続けて振り返りを書かせる。そうすることで、本時のねらいに即して学習内容や方法を振り返り、次の学習や実生活での活用に関連付けて自らの学びを意味付ける。